

ヒルテイの幸福論

前二、三回のコラムで、私は仕事の意味について考えた。古今の幸福論の名著を開いてみると、人間の幸福がいかに深く仕事と結びついているかを真剣に問う文章が繁く出てくる。例えばヒルテイの『幸福論』を開けば、その第一章の冒頭が「仕事の上手な仕方」である。ヒルテイはこういう。

「人間の本性は働くようにできている。だから、それを勝手に変えようとすれば、手ひどく復讐される。もちろん人間は、とうの昔に休息の楽園からは追放されている。神は働くことを人間に命じたが、しかしまた否応ない働きにもなる慰めをも与えてくださった。だから、本当の休息はただ活動の最中にのみある」(草間平作・大和邦太郎訳、岩波文庫)

そうであれば、仕事の性質などどうでもいいことだ、人間を幸せに導くものは仕事そのものであり、仕事こそが心を健やかに保つ唯一のものだといつて、さらに次のように述べる。

「現代のたいいていの神経病は、それが仕事を持たない両親からの遺伝の呪いの結果でもないかぎり、

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月退任)。二〇一七年六月より現職。

なおってしまふだろう。そして療養所の医師や、精神病院は大方みな、彼等の患者を失うだろう」

このヒルテイの考え方は、前二回のこのコラムで紹介した森田正馬まさはらのそれとほとんど同じであるように思われる。森田の神経症の療法思想の用語でいえば、こうである。己の精神の内界をみつめつづけて煩悶はんもんの人生を過ごしてきた症者の「即我的態度」を、仕事という具体的な対象に向かわせこれに没入させることよって「即物的態度」に変じさせる。つまりは症者の心のおきどころを内向から外向へと転換させること、これが療法の核心であった。

仕事に没入するということは、自分以外の何ものかに向かつて努力するということである。仕事とは、今自分の目の前にある対象に自分を投げ出すことであり、そこには過去もなければ未来もない。要するに「無我夢中」の状態である。

対象に心を奪われて、自分の存在がみえなくなつてしまふような状態ほど幸福なものが他にあるとは思えない。